

フェミニズム，資本主義，歴史の狡猾さ

著者	FRASER Nancy, 関口 すみ子[訳]
出版者	法学志林協会
雑誌名	法学志林
巻	109
号	1
ページ	27-51
発行年	2011-08-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/6860

翻 訳

フェミニズム，資本主義，歴史の狡猾さ⁽¹⁾

ナンシー・フレーザー著

関 口 す み 子 訳

私はここで第二波フェミニズムを概観したい。あれこれの活動の潮流，あれこれのフェミニスト理論の一部，あれこれの運動の地理的断片，あれこれの社会的な女性の層ではなく，第二波フェミニズムを，全体として，画期的な社会現象として見ていきたい。四十年近くフェミニストのアクティヴィズムをふり返って，この運動の全体的な軌跡と歴史的意義を評定することに踏みこみたい。とはいえ，ふり返りながらも，私たちが前を見ることに役立ちたい。私たちがたどってきた道のりを再構成することで，今日直面している課題に光を当てたい——巨大な経済危機・社会不安・政治再編の時代⁽²⁾に。

それでは，第二波フェミニズムの大まかな輪郭と全体的な意味についての物語を語っていく。歴史的語りと社会的理論的分析に同等の配分をして，私の物語は三つの点をめぐって展開し，そのそれぞれが，資本主義の歴史の特定の時期と関係で，第二波フェミニズムを位置づけていく。第一点は，「国家により組織された資本主義」と私が呼ぶ文脈の中での，この運動の誕生に関わる。ここでは，反帝国主義ニューレフトからの第二波フェミニズムの出現を，戦後期の国家組織型資本主義社会に蔓延した男性中心主義への根源的挑戦として位置づけることを提起する。この時期を概念化して，運動の根源的解放の約束を，不公正の拡張された意味・社会の構造的批判と結びつけていく。第二点は，ネオリベラリズムの勃興という社会的文脈の根源的変化の中での，フェミニズムの進化過程に関わる。ここでは，運動の非常な成功だけでなく，フェミニズム

八六

の理想の一部と、勃興する資本主義の新形態——ポストフォーディズムの、「まとまりのない」、トランスナショナルなそれ——の要求とのおぞましい収斂を描くことを提起する。この段階を概念化して、私は、第二波フェミニズムが、はからずも、リューク・ボルタンスキーとエーヴ・チアペロが「資本主義の新たな精神」と呼ぶものに、鍵となる成分を提供したのではないかと問う。第三点は、資本主義の危機とアメリカ合衆国の政治的再編という今日の文脈——それはネオリベリズムから社会組織の新形態への転換の始まりになるかもしれない——での、フェミニズムの再方向づけの可能性に関するものである。ここでは私は、金融資本とアメリカ合衆国のヘゲモニーという双子の危機に揺さぶられ、バラク・オバマの大統領任期の展開を待つ世界で、フェミニズムの解放の約束を再活性化させる展望を検討することを提起する。

そして、全体として、第二波フェミニズムの軌跡を、資本主義の最近の歴史との関係で位置づけることを提起する。こうすることで、最初数十年前に私を鼓舞し、かつ、今もなお、今日におけるジェンダー公正の展望を明確にするうえで最良の希望を提供しているように思える、社会主義フェミニズムの理論化を再生できたと願う。とはいえ、私の目標は、もはや時代遅れとなった二元体制論を再活用することではなく、最近のフェミニスト理論の最良のものと、資本主義に関する最近の批判理論の最良のものとを統合することにある。

このアプローチの背後にある考え方を明確にするために、おそらく第二波フェミニズムについて最も広くもたれている見解への、私の不満を説明しておきたい。よく言われるように、運動は文化を変えることには相対的に成功したが、制度を変えることは相対的に失敗したとされる。この評定は二面性をもつ。一面では、数十年前にはあれほど論争的であった、ジェンダー平等というフェミニズムの理想は、いまや社会の主流にしっかりと根づいている、他面では、実践ではいまだ実現されていないというものである。したがって、たとえば、セクシュアル・ハラスメント、セクシュアル・トラフィッキング、不平等賃金な

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

どに対するフェミニストの批判は、それほど遠くない過去において扇動的にすら見えたが、今日では広く受け入れられている、だが、態度の面での根本的変化はその実践を根絶しなかった。したがって、第二波フェミニズムは画期的な文化革命を成し遂げたが、メンタリテにおける大変化は（いまだ）構造的・制度的変化を引き起こしていないとしばしば論じられる。

フェミニズムの理想は今日広く受け入れられていると正しくも主張するこの見解には、一理ある。しかしながら、文化的には成功、制度的には失敗というこの命題は、第二波フェミニズムの歴史的意義と将来の見通しを明らかにするうえでそれほど役に立つものではない。制度が文化より遅れていると仮定することで——あたかも一方が変わらないのに他方が変わるかのごとく——、フェミニズムの希望を実現するためには、一方を他方に追いつかせさえすればよいと示唆している。その結果として、より複雑でおぞましい可能性、つまり、第二波フェミニズムから生まれた文化的態度の拡散が、フェミニスト活動家が予想も意図もしなかった、もう一つの社会的変化——戦後資本主義の社会組織化の変化——に巻き込まれたのではないか、ということを曖昧化してしまう。この可能性は、さらに鋭く定式化できる。第二波フェミニズムによって始まった文化的変化は、それ自体は有益なものだとしても、公正な社会のフェミニスト版と真っ向から対立する、資本主義社会の構造的変化を正当化するのに一役かったというものである。

この論考の目的は、この、耳をふさぎたくなるような可能性について探求することである。仮説はこのように立てられうる。すなわち、第二波フェミニズムの真に新しい点は、男性中心の・国家組織型資本主義を批判する際に、分析上異なるジェンダー不公正の三つの次元、すなわち、経済・文化・政治という三つの次元を編み合わせたことであった。国家組織型資本主義を、この三視角が自由に混ぜ合わせられた、広範囲で多面的な精査にさらすことで、フェミニストは、細分的でかつ体系的な批判を生み出した。しかしながら、続く数十年

のうちに、不公正のこの三つの次元は、お互い同士間で、また、資本主義批判から分離してしまった。フェミニストの批判の断片化とともに、その一部分の選別的編入と部分的回復がやってきた。お互い同士間で、また統合していた社会批判から分離して、第二波フェミニズムの希望は、より大きく全体的な、公正な社会の私たちの見通しと深く矛盾するプロジェクトのために動員された。歴史の狡猾さの良い例として、ユートピア願望は、資本主義の新形態——ポストフォードイズムの、トランスナショナルの、ネオリベラルのそれ——への移行を正当化する、通底する感覚として第二の生を見いだしたのである。

以下では、この仮説を三段階——先に述べた物語の三つの転換点に対応する——にわたって練り上げることを提起する。第一段階では、男性中心の国家組織型資本主義に対する第二波フェミニズムの批判を、公正への三つの視角——再配分・承認・代表——を統合する配慮として再構築する。第二段階では、その布陣の崩壊と、その一部がネオリベラル資本主義を正当化するために選別的に動員されたことを描き出す。第三段階では、経済危機と政治的開放という現在の時点で、フェミニズムの解放の約束を取り返す展望を検討する。

I. フェミニズムと国家組織型資本主義

第二波フェミニズムの出現を、国家組織型資本主義という文脈の中で位置づけるところから始めたい。「国家により組織された資本主義」とは、戦後の覇権的な社会編成、すなわち、国家が国民経済の舵取りに積極的役割を果たす社会編成を指す。⁽³⁾ 国家組織型資本主義の形態で私たちに最もなじみがあるのは、当時の第一世界における福祉国家がそれであり、それは、資本主義の好況・不況の循環を穏やかにするためにケインズ流の手法を用いた。大恐慌と戦時計画の経験を用いて、これらの国家は、様々な形態の経済社会機構統制——インフラストラクチャーへの投資・産業政策・再配分型税制・社会的給付・企業制御・基幹産業の一部の国有化・公共財の脱商品化など——を実行した。1945年に

フェミニズム，資本主義，歴史の狡猾さ（関口）

つづく数十年の間に，資本主義を「組織する」ことに最も成功したのは最も豊かで強力な OECD 諸国であったとはいえ，国家組織型資本主義の変種は当時の言葉でいう第三諸国にも見られた。困窮化した元植民地において，新たに独立した「開発国」は，より限られた諸力を，輸入代替政策・インフラストラクチャーへの投資・基幹産業の国有化・教育への公共支出という手段によって，国民経済成長を急発進させるために使おうとした⁽⁴⁾。

したがって，基本的には，この表現を，OECD 福祉国家と，戦後期の元植民地の開発途上国を指すものとして使う。何と云っても，第二波フェミニズムが 1970 年代初期に最初に勃発したのはこれらの国々においてであった。正確には何が勃発を引き起こしたのかを説明するために，国家組織型資本主義の政治文化を定義する四大特徴を指摘したい。

経済主義

国家組織型資本主義は，定義上，経済市場を制御する（場合によっては，とって代わる）ための公的な政治力の使用を伴った。これは主に，資本の利益のための危機管理の問題であった。にもかかわらず，当の国家は，社会的包摂・社会的平等・階級横断的連帯を促進するという自らの主張から政治的正当性の多くを引き出した。だが，これらの理想は，経済主義的・階級中心的に解釈された。国家組織型資本主義の政治文化において，社会問題は，分割可能な財（とりわけ収入と職）の公正な配分に関する問題として，主に配分の用語で論じられ，他方，社会の分断は，主に階級というプリズムを通して見られた。したがって，典型的な社会的不公正は不正な経済配分であり，そのパラダイムの表現は階級不平等であった。こうした階級中心・経済主義的思考法の効果は，不公正の他の次元・場・軸を，完全に曖昧化とまでは言わないまでも，周縁化してしまったことである。

八二

男性中心主義

そこから，国家組織型資本主義の政治文化は，理念型としての市民を，エ

スニック・マジョリティの男性労働者——一家の稼ぎ手であり・家族を持つ男性——として想定するということになった。この労働者の賃金が、唯一のではないとしても家族の主要な経済的支えであるべきだ、妻が得るどんな賃金もたんに補足的なものであるべきだとも広く想定された。深くジェンダー化された、「家族賃金」というこの構築物は、近代性や上昇移動性を暗示する社会理想として、また、雇用・福祉・開発問題での国家政策の基礎として機能してきた。たしかに、男性の賃金だけで子どもや非雇用の妻を支えるのに充分であることはまれだったから、この理想は大半の家族にはあてはまらなかった。また、たしかに、この理想がリンクしていたフォーディズム型産業は、低賃金のサービスセクターの繁栄によってじきに相対的に小さく見えるようになった。しかしながら、1950年代1960年代において、家族賃金理念は、ジェンダー規範を定義し、それを破ろうとする者に罰を加え、各世帯で男性の権威を再強化し、私営化された国内消費へと意欲を流し込むのに役立ったのだ。同様に重要なことに、賃労働をもちあげることで、国家組織型資本主義の政治文化は、賃金のないケア労働や再生産労働の社会的重要性を曖昧化した。家族と賃金に関する男性中心的理解を制度化して、ジェンダー不正を自然化し、政治論争の舞台から引きずり下ろした。

国家管理主義

国家組織型資本主義は、また、テクノクラートの・管理者的エートスに満ちた国家管理主義でもあった。政策を立案するのに職業的専門家に、それを実行するのに官僚的組織に依存して、福祉・開発国家は、自分たちが奉仕しているはずの対象を、行動的市民というよりも顧客・消費者・納税者として扱った。その結果は、公正の問題を、専門家の計算・協調主義者の交渉によって解決されるべき技術的問題として扱う、脱政治化した文化であった。自分たちのニーズを政治論議や論争によって民主的に解釈する力をつけられるどころか、一般市民は（せいぜい）上から定義され配分され

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

る満足の受け身の受け手として位置づけられた。

ウェストファリアニズム

最後に、国家組織型資本主義は、定義上、国民国家の諸力を、国民の名において——必ずしも国民の利益のためにはないにせよ——国民経済の発展を支えるように動員することをめざした一国的編成であった。ブレトンウッズ制御体制によって可能となったこの編成は、領土に縛られた政治組織体への政治空間の分割に依拠していた。その結果、国家組織型資本主義の政治文化は、公正の拘束的義務は自国民にのみ適用されるという「ウェストファリア的」見解を制度化した。戦後期の社会闘争の大半に内在していたこの見解は、公正の要求を領土国家の国内政治アリーナへと流し込んだ。その結果は、国際的な人権と反帝国主義連帯へのリップサービスにかかわらず、公正の範囲を切り詰め、境界をまたぐ不公正を、完全に曖昧化⁽⁵⁾とまでは言わないまでも周縁化してしまうことであった。

以上のように、概して、国家組織型資本主義の政治文化は、経済主義的、男性中心的、国家管理主義的、ウェストファリア的であった——これらの特徴はすべて、1960年代後半と1970年代に批判にさらされた。この爆発的ラディカリズムの時代に、第二波フェミニストは、ニューレフト・反帝国主義の仲間と手をとって、国家組織型資本主義の経済主義・国家管理主義・そして（より低い程度ではあるが）ウェストファリアリズムに挑戦した。後者の男性中心主義——そしてそれに伴い、同志や同盟者のセクシズム——と闘いながら。これらの点を一つ一つ検討したい。

経済主義に対する、第二波フェミニズムの批判

不公正を、専ら階級的（悪）配分と同一視することを拒絶して、第二波フェミニズムは、他の解放運動と手をとって、国家組織型資本主義の制約的・経済主義的思考法を暴露した。「個人的なこと」を政治化して、不公

正の意味を拡大し、太古以来見過ごされ・容認され・あるいは合理化されてきた社会的不平等を不公正として再解釈した。マルクス主義が専ら経済へ焦点をあてるのも、リベラリズムが専ら法に焦点をあてるのも拒絶して、ほかにある——家族、文化的伝統、市民社会、日常生活——不公正を暴露した。加えて、不公正を匿っていかねない軸の数を上げた。階級の中心性を拒絶しながら、社会主義フェミニスト、ブラック・フェミニスト、反帝国主義フェミニストはまた、ジェンダーを特権的範疇というあの同じ地位に据えようとするラディカル・フェミニストの努力に反対した。ジェンダーだけでなく、階級・人種・セクシュアリティ・ナショナリティに焦点を当てることで、今日広く受け入れられている「交差主義的」道をきり開いた。最後に、第二波フェミニズムは、不公正の範囲を拡げて、セクシュアリティ、家事、再生産、女性に対する暴力を取り込んだ。そうすることで、不公正の範囲を、経済的不平等だけでなく、地位のハイラーキーと政治権力の非対称性を含むところまで拡げた。振り返ってみれば、公正の一元的・経済主義的見方を、より広い、経済・文化・政治を含む三次元的理解と置き換えたと言える。

その結果は、個々の問題の長々としたリストではない。それどころか、新たに発見された数多くの不公正を結びつけたのは、女性の従属は、社会の構造に深く根ざした体系的なものであるという考えであった。もちろん、第二波フェミニズムは、社会の全体性をどのように性格づけたら一番よいかを議論した。——はたして、「家父長制」なのか、資本主義と家父長制の結合した「二重体制」なのか、帝国主義世界体制なのか、それとも、私自身が好む見方で言えば、国家組織型資本主義社会の歴史的に特定の男性中心的形態であり、相互に浸透しあう三つの従属秩序、すなわち、(悪) 配分、(誤) 承認、(誤) 代表によって構造化されたものなのか。だが、こうした差異にもかかわらず、大半の第二波フェミニスト——リベラル・フェミニストは著しい例外として——女性の従属を克服するためには社会全体の深い構造の抜本的変革が必要であるという点

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

では一致していた。体制変革へのこうした共通の思いが、時代の幅広い解放の興奮に、この運動が起源を持つことを示していた。

男性中心主義に対する、第二波フェミニズムの批判

第二波フェミニズムが1960年代のラディカリズムの全体的な雰囲気を共有しているとしても、他の解放運動とは緊張関係に立っていた。その主なターゲットは、結局のところ、国家組織型資本主義のジェンダー不公正であり、これはフェミニストでない反帝国主義者やニューレフトの優先事項だとはおよそ言えなかった。その上、第二波フェミニズムは、国家組織型資本主義の男性中心主義への批判を繰り広げるうえで、左翼内でのセクシズムとも対決しなければならなかった。リベラル・フェミニストとラディカル・フェミニストにとり、このことは特に問題ではなかった。たんに分離主義者となって左翼を出て行けばよかったのだ。それに対して、社会主義フェミニスト、反帝国主義フェミニスト、有色のフェミニストにとり、困難は、左翼の中にとどまって左翼内のセクシズムと対決することであった。

少なくともしばらくの間は、社会主義フェミニストはこの難しいバランスをとるのに成功した。男性中心主義の核を、女性によってなされるか、女性と関連づけられる活動（支払われるのであれ、支払われないのであれ）の価値を体系的に引き下げるジェンダー分業にあると突き止めた。この分析を国家組織型資本主義にあてはめて、支払われないケア提供の大半に対する女性の責任、結婚と個人生活における女性の従属、労働市場のジェンダー分離、政治体制での男性支配、福祉給付・産業政策・開発計画の男性中心主義の間の深い構造的連関を明らかにした。実際には、ジェンダー悪配分・誤承認・誤代表が収斂する場としての家族賃金を暴露した。その結果は、経済・文化・政治を、国家組織型資本主義における女性の従属の体系的説明の中に統合する批判だった。たんに、賃金労働者としての女性を

資本主義社会の中に完全に組み入れることをめざすのとは全く違って、第二波フェミニストは、体制の深い構造とそれを動かしている諸価値を変革する——一つには、賃金労働を相対化して、賃金が出ない活動、とりわけ、女性によって担われている、社会に不可欠なケア労働に価値を与えることによって——ことをめざした。

国家管理主義に対する、第二波フェミニズムの批判

だが、国家組織型資本主義に対するフェミニストの異議は、内容だけでなく過程に関するものだった。同盟者のニューレフト同様、彼女たちは、国家組織型資本主義の官僚的・管理者的エートスを拒否した。フォーディズム型組織に対する1960年代の広範な批判に、ジェンダー分析をつけ加え、大規模な・トップダウン型の組織の文化を、国家組織型資本主義の職業人・管理者層の近代的男性性の表現と解釈した。姉妹的繋がり of 水平的な対抗的エートスを発展させて、第二波フェミニズムは、意識覚醒という全く新たな組織的実践を創り出した。理論・実践間の鋭い国家管理主義的分断を橋渡しすることをめざして、フェミニズムはカウンター・カルチャーの民主化運動——反ハイラーキー的、参加的、民衆的——として自らを形成した。「NGO」という頭文字がまだ存在しなかった時代に、フェミニストの学者・弁護士・ソーシャルワーカーたちは、脱政治化した専門知識を備えた君臨する職業人的エートスよりは、グラスルーツの方に同一化した。

とはいえ、カウンター・カルチャーの同志たちの一部とは異なり、多くのフェミニストは、国家組織をたんに拒否したわけではなかった。国家組織にフェミニスト的価値を注入することをめざして、市民の力をつける、参加デモクラシー的国家を展望したのである。国家と社会の関係を事実上再構想して、福祉や開発政策の受け身の対象とされている人々を、ニーズ解釈という民主的過程に参加する力をつけた、積極的な主体に変えることをめざした。したがって、目標は、国家組織を解体することよりも、それを、

フェミニズム，資本主義，歴史の狡猾さ（関口）

ジェンダー公正を促進し，さらには表現するような機関へと変えることだった。

ウェストファリアニズムに対する，第二波フェミニズムの相反的態度
 おそらく，より相反的なのが，国家組織型資本主義のウェストファリア的次元へのフェミニズムの関係である。時代の世界大のベトナム戦争反対の気運に起源をもつことから，フェミニズムは，明らかにトランスボーダーの不正に敏感であった。このことは，発展途上世界のフェミニストに特にあてはまり，そのジェンダー批判は，帝国主義批判と絡み合っていた。とはいえ，そこでも，他と同様，大半のフェミニストは，それぞれの国を自分たちの要求の主な宛先と見ていた。このように，第二波フェミニズムは，ウェストファリア体制を，理論のレベルで批判したとしても，実践のレベルで再び持ち出す傾向があった。この枠組は，世界を領土に縛られた政治体に分割したわけだが，国家がいまだ社会を操縦するのに必要な能力を持つと見られていた時代に，また，テクノロジーが可能としたリアルタイムのトランスナショナルなネットワークがいまだない時代に，既定の選択肢であり続けた。したがって，国家組織型資本主義の文脈では，「姉妹の繋がりはグローバル」というスローガンは（それ自身帝国主義的であるとすでに異議が唱えられているが），実際に追求できるポストウェストファリアの政治プロジェクトというよりも，抽象的なジェスチャーとして機能していた。

概して，第二波フェミニズムは，国家組織型資本主義の経済主義・男性中心主義・国家管理主義を拒否したとしても，相反的にウェストファリア的であり続けた。しかしながら，これらすべての点において，第二波フェミニズムにはかなりのニュアンスが含まれていた。経済主義を拒否する際に，この時期のフェミニストは，女性の解放というプロジェクトにおいて，配分の公正や経済批判の中心性を疑ったことはなかった。ジェンダー不公正の経済面を最小にした

がるところか、文化・政治という他の二面との関係を明確にして、それを深化しようとした。同様に、家族賃金の男性中心性を拒否する際に、それをたんに二人稼ぎ手の家族と置き換えようなどとは決してしなかった。ジェンダー不公正を克服するとは、ケア提供の体系的な価値の切り下げとジェンダー分業（支払われるのにせよ、支払われないのにせよ）を終わらせることを意味していたのだ。最後に、国家組織型資本主義の国家管理主義を拒否する際に、公正に役立つような経済生活を組織化するのを可能とする、強い政治組織の必要性を疑ったことはなかった。国家制御から市場を解放したがるところか、国家権力を民主化し、市民参加を最大限にし、説明責任を強化し、国家・社会間の風通しを良くすることをめざしたのである。

総じて、第二波フェミニズムは、不公正の拡張された理解と資本主義社会の体系的批判を前提に、現状変革的な政治プロジェクトを採用した。運動の最も先進的な潮流は、自分たちの闘いを、経済的搾取・地位のハイラーキー・政治的従属に対して同時に闘うことをめざした、多次元的なものと見ていた。その上、彼女たちにとって、フェミニズムとは、より広い解放プロジェクトの一部であり、ジェンダー不公正に対する闘いは、人種主義・帝国主義・ホモセクシュアル嫌悪・階級支配に対する闘いと必然的に結びついており、そのどれもが、資本主義社会の深い構造変革を必要としていた。

Ⅱ. フェミニズムと「資本主義の新たな精神」

後でわかったように、そのプロジェクトは大きくは死産に終わり、当時はよく理解されていなかったより深い歴史的力の犠牲となった。振り返ってみると、第二波フェミニズムの登場は、資本主義の性格の歴史的変化、すなわち、すで

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

市場を使うことを提唱した。ブレトンウッズ体制の重要要素を解体して、国民経済のケインズ流舵取りを可能としていた資本制御を取り除いた。経済社会機構統制にかえて、私営化と制御撤廃を推進した。公的給付と社会的市民権にかえて、「トリクルダウン」と「個人責任」を、福祉・開発国家にかえて、瘠せてみすばらしい「競争国家」を。ラテン・アメリカで試運転したのち、このアプローチは、東欧・中欧での資本主義への移行の大半を導いた。サッチャーとレーガンによって声高に提唱されたとはいえ、第一世界では、徐々に、不均質に用いられただけだった。それに対して、第三世界では、新自由主義化は、「構造調整」という強制されたプログラムとして、債務返済の脅しをもって課せられた。そして、開発主義の基本理念をすべてひっくり返し、ポストコロニアル国家に、財を剥奪し、市場を開き、社会支出を大幅に削減することを強制した。

興味深いことに、第二波フェミニズムは、この新たな条件の下で花開いた。ラディカルなカウンター・カルチャー運動として始まったものは、今や、広範囲にわたる巨大な社会現象となる途上である。あらゆる階層、エスニシティ、ナショナリティ、政治的イデオロギーの信者を引きつけて、フェミニスト思想は、社会生活のありとあらゆる所に入っていく、それが触れたすべての人々の自己理解を変えた。その結果は、たんにアクティヴィストの数を増やしただけでなく、家族・仕事・尊厳の常識的な見方を作りかえたのだ。

第二波フェミニズムとネオリベリズムが並んで栄えたのはたんに偶然だったのだろうか。それとも、そこには、あいにくの、密かな親和性があったのだろうか。第二の可能性は異端的であるとはいえ、探求する必要がある。たしかに、ネオリベリズムの登場は、第二波フェミニズムが活動する土壌を劇的に変えた。その結果は、フェミニズムの理想を再意味化することであったとここで論じていく。⁽⁶⁾ 国家組織型資本主義の文脈の中で明確な解放的突撃力を持っていた志は、ネオリベラル時代、はるかに漠然とした意味を帯びた。福祉・開発

国家が自由市場主義者から攻撃を受ける中での、経済主義・男性中心主義・国家管理主義・ウェストファリアリズムに対するフェミニストの批判は新たな結合力をおびた。フェミニストの批判の四つの焦点を再考することで、この再意味化のダイナミズムを明らかにしたい。

再意味化された、フェミニストの経済主義批判

ネオリベラリズムの登場は、資本主義社会の政治文化の大幅変更と軌を一にしていた。この時期に、公正の要求は、アイデンティティと差異の承認の要求に次第になっていった。⁽⁷⁾ この「再配分から承認へ」の転換とともに、第二波フェミニズムをアイデンティティ・ポリティクスの一変種へ変える強い圧力がやって来た。たしかに、進歩的変種ではあるが、にもかかわらず、文化批判を過大評価し、経済批判を過小評価する傾向があった。実践において、この傾向は、社会経済闘争を承認の闘争の下に置くものであり、アカデミーにおいて、フェミニスト文化理論はフェミニスト社会理論を覆い隠し始めた。経済主義への必要な修正として始まったものは、同じように一面的な文化主義となった。かくして、再配分も承認も含むより広く豊かなパラダイムに到達するのではなく、第二波フェミニズムは、切り詰められた一つのパラダイムをもう一つのそれと事実上置き換えたのだ。

しかもタイミングが最悪だった。承認への転換は、平等主義のあらゆる記憶を抑える以上のことを望んでいないネオリベラリズムの登場とぴったりと符合した。かくして、フェミニストは、経済批判を強めることを状況が求めていたまさにその時に、文化批判を絶対化した。しかも、批判が分裂していくにつれ、文化派は経済派と自らを切り離しただけでなく、それまで統合していた資本主義批判からも自らを切り離した。資本主義批判から切り離れて、他の分節化に供するようになり、この派は、ヘスター・エイゼンシュタインが呼ぶところの、ネオリベラリズムとの「危険な結びつき」へと引き込まれかねなくなった。⁽⁸⁾

再意味化された，フェミニストの男性中心主義批判

したがって，ネオリベリズムがフェミニストの男性中心主義批判を再意味化するのには時間の問題だった。どのようにしてかを説明するために，私はリューク・ボルタンスキーとエーヴ・チアペロによってなされた議論を採用することを提起する。彼らは，その重要な本『資本主義の新たな精神』の中で，資本主義は歴史的断裂の瞬間に，自分たちに向けられた批判の矛先をも回収しながら，周期的に自己を作りかえると主張している⁽⁹⁾。そのような瞬間，反資本主義の批判の諸要素は，姿を現した新形態の資本主義を正当化するために再意味化される。そして，その新たな資本主義は，もともと意味のない，際限のない蓄積労働を新たな世代に背負わせるのに必要な，より高い，モラル上の意味をそなえることになる。ボルタンスキーとチアペロによれば，現代のフレキシブルなネオリベリズムを正当化するのに役立ったこの新たな「精神」は，企業文化の灰色の順応主義を断罪した，ニューレフトの国家組織型資本主義に対する「アーティスティックな」批判から造形された。彼らによれば，ネオリベラル管理の理論家たちは，68年5月の口調で，新たな「連結主義的」資本主義という「プロジェクト」を提案し，そこでは，水平的チームとフレキシブルなネットワークが厳格な組織的ハイラーキーにとって代わり，そのことによって，個人の創造性を解放するとした。その結果は，資本主義と現実との新たなロマンス——シリコンバレーの新テック企業で繰り広げられ，今日ではその純粋な表現をグーグルのエートスに見ることができる——であった。

ボルタンスキーとチアペロの論理は独創的で深い。だが，ジェンダー・ブラインドであるが故に，ネオリベラル資本主義の精神の性格を完全にとらえるにはいたっていない。たしかに，彼らが適切にも言うように，その精神は，自由で邪魔されない自己形成的個人というマスキュリンなロマンスを含んでいる。だが，ネオリベラル資本主義は，シリコンバレーやグー

ルだけでなく、ウォルマートやマキタドーラやマイクロクレジットとも大いに関係があるのだ。しかも、それが不可欠とする労働者は圧倒的に女性である。若い独身女性だけでなく、結婚している女性、子どものいる女性であり、人種化された女性だけでなく、ほとんどすべてのナショナリティやエスニシティの女性である。そういうものとして、女性は地球上の労働市場に流れ込んだ。その結果、家族賃金という、国家組織型資本主義の理想をきっぱりと駆逐した。「まとまりのない」ネオリベラル資本主義において、その理想は二人稼ぎ手家族という標準にとって代わられた。この新しい理想の現実は、賃金水準の低下、職場保障の低下、生活水準の低下、世帯あたりの労働時間数の急激な増大、二重シフトの悪化——三重シフトまたは四重シフト、女性が率いる世帯の増加であることなどは気にするなというわけだ。まとまりのない資本主義は、女性の進出とジェンダー公正という新たなロマンスを練り上げることによって、醜いものも美しくしてしまう。

耳をふさぎたくなるようなことかもしれないが、私は、第二波フェミニズムは、ネオリベラリズムという新精神に、鍵となる成分をはからずも提供したのではないかと提起しているのである。家族賃金への批判は、今や、フレキシブルな資本主義に、より高い意味やモラル上の得点を提供するロマンスのかなりの部分を提供している。毎日の闘いに倫理的な意味を与えて、フェミニズムのロマンスは社会の両極において女性を引きつけている。一方では、職業人的中産階級の女性要員がガラスの天井を断固として割ろうとしている。他方では、女性のテンプスタッフ、パートタイマー、低賃金のサービス産業従事者、家庭内労働者、セックスワーカー、移民、EPZ労働者、マイクロクレジット借入者が、収入と物質的安全だけでなく、尊厳、向上、伝統的権威からの解放を求めている。両方の極において、女性の解放という夢は、資本蓄積のエンジンにくくり付けられている。このように、第二波フェミニズムの家族賃金批判は、意図に反した余生を送るこ

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

とになった。かつては、資本主義の男性中心主義のラディカルな分析の中心であったが、今日では賃労働の資本主義による価格統制に寄与している。

再意味化された、フェミニストの国家管理主義批判

ネオリベラリズムはまた、前時代の国家管理主義批判をも再意味化し、国家行動をたんに削減する計略のための種にした。この新しい環境では、福祉国家のパターナリズムに対するフェミニストの批判と、乳母国家というサッチャーの批判との間ほんの一步にしか見えなかった。少なくともアメリカ合衆国の経験ではそうであり、ビル・クリントンが、セクシストで悪名高い貧困救済体制を微妙に批判し、「我々が知っているような福祉を終わらせる」計画を出して、所得補助金への連邦の給付金を廃止した時、フェミニストはなすすべなく見守っていただけだった。その間に、ポスト植民地においては、開発国家の男性中心主義に対する批判は、国家の縮小によってあいたスペースを埋めようとあらゆる所に現れた NGO に対する熱狂へと変身した。たしかに、これらの組織の最良のものは、公共サービスの喪失に苦しむ人々が緊急に必要なとする物質的援助を提供した。だが、その結果として、地域のグループを脱政治化し、その課題を第一世界の資金提供者たちが好む方向にねじまげることがしばしばであった。さらには、その穴埋めの性格からして、NGO の行動は、公共による給付が減っていくのを止めたり、対応的な国家行動への政治的支持を築くのにはたいして役に立たなかった。⁽¹⁰⁾

マイクロクレジットの爆発的増大は、このジレンマをよく表している。受動性を誘導するトップダウン型の国家管理主義のお役所仕事に、エンパワメントと下からの参加というフェミニストの価値を対置して、こうしたプロジェクトの設計者たちは、個人の自助、コミュニティ・ネットワークキング、NGO の監督、および市場メカニズムの革新的統合——すべてが女性の貧困、ジェンダー従属と闘うことをめざしたもの——を造り出した。

これまでの結果は、借金返済のかんりの記録と、生活改革の逸話的な証拠などである。だが、こうしたプロジェクトをめぐるフェミニストの大騒ぎで隠されているものは、マイクロクレジットは、国家が貧困と闘うマクロ構造的努力を放棄した——小規模な貸し出しではこうした努力にとって代わることなどとてもできない——ちょうどその時に花開いたという、耳をふさぎたくなるような偶然である⁽¹¹⁾。この場合においても、官僚主義的パターンリズムに対するフェミニストの批判は、ネオリベラリズムによって回収された。国家権力を、市民のエンパワーメントと社会的公正を実現する機関として作りかえようという当初の展望は、今や、市場化と国家の削減のために使われているのだ。

再意味化された、ウェストファリアリズムに対するフェミニストの相反的態度

最後に、ネオリベラリズムは、良かれ悪しかれ、第二波フェミニズムのウェストファリア体制に対する相反的態度を変更した。「グローバリゼーション」という新たな文脈の中で、固定した領土国家が、公正のための義務と闘いの唯一正当な担い手ではもはやないの言うまでもない。フェミニストは、こうした見解に挑戦するうえで、環境保護主義者、人権活動家、WTOの批判者たちと手を組んできた。国家組織型資本主義では実現性のなかったポストウェストファリアの直観を動員して、前時代に傍らに追いやられていたり・なおざりにされていたトランスボーダーの不正義を標的にした。トランスナショナルなネットワークを作り上げるための新たな通信技術を活用して、フェミニストは、「ブーメラン効果」——ローカルな侵害に光を当てるためにグローバルな世論を動員し、国家に黙認することを恥とさせる⁽¹²⁾——など、革新的戦略の先鞭を切ってきた。その結果は、トランスナショナルで、多様なスケールをもつ、ポストウェストファリアの、フェミニストのアクティヴィズムの将来性のある新形態であった。

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

しかしながら、トランスナショナルに舵をきったことは、問題ももたらす。多くのフェミニストは、しばしば国家のレベルに挫折し、そのエネルギーを、「国際」アリーナ、なかでも、ナイロビ、ウィーン、北京、そしてその先にいたる、国連関連会議の連続にふり向けてきた。グローバル・ガバナンスという新レジームを展望する、「グローバル・シビルソサイエティ」の中で存在感を示しながらも、すでに述べたような問題に巻き込まれた。たとえば、女性の人権のための闘いは、貧困などに対して、暴力や再生産に圧倒的に焦点があてられた。冷戦時の、一方での市民的権利と政治的権利の分裂、他方での社会的権利と経済的権利の分裂を承認して、これらの努力も、再分配に対して承認を優先してきた。加えて、これらのキャンペーンは、フェミニストの政治を NGO 化することを促進し、プロフェッショナルとローカル・グループとのギャップを増大し、そしてそれに従い、英語を話すエリートに不均衡な発言権を与えた。EU の政策機構とフェミニストとの関係でも、よく似たダイナミクスが作動している——とくに、真にトランスナショナルなヨーロッパ大の女性運動が不在の状況では。このように、フェミニストのウェストファリアリズムへの批判は、ネオリベラリズムの時代において、両義的なものであった。公正の範囲を国民国家の外まで広げる健全な試みとして始まったものは、いくつかの点で、資本主義の新形態の行政的需要とぴったりと符合するものとなったのである。

したがって、全体として、ネオリベラル時代のフェミニズムの運命は、パラドックスの様相を呈している。一方では、前時代に比較的小規模な対抗文化であった運動は、急激に広まり、その理想を地球上にふりまくことに成功した。他方では、フェミニズムの理想は、変化した文脈の中で微妙な変化をこうむった。国家組織型資本主義の時代には疑いもなく解放的であった、経済主義・男性中心主義・国家管理主義・ウェストファリアリズムへの批判は、今や、曖昧さに満ちあふれ、資本主義の新形態の正当化需要に役立ちやすいものとなっている。結局のところ、この資本主義には、再配分の要求よりも承認の要求の方

が組みしやすいだろう。蓄積の新形態は女性の賃労働の上に築かれているわけであるし、グローバルなスケールでもっと自由に活動するために、市場を社会制御から解放しようとしているのだから。

Ⅲ. 未来は未知数？

しかしながら、今日、この資本主義自体、重大な分岐点をむかえている。たしかに、グローバルな金融危機と、指導的国家——今やすべてケンズ流——による明らかにポストネオリベラルな対応は、経済体制としてのネオリベリズムの終焉の始まりを示している。バラク・オバマの選出は、その最深部においてさえ、政治的プロジェクトとしてのネオリベリズムから決定的に離反する合図かもしれない。オールタナティブを分節化することをめざした、新たな動員の波の早い兆候を見ることになるかもしれない。したがって、今述べてきたのと同じくらい、巨大で深い、さらにもう一つの「大転換」の間際に立っている可能性もある。

もしそうだとするならば、今後、後に続く社会の形態自体が、激しい論争の的となるだろう。しかも、フェミニズムは、二つのレベルでその論争で重要な役割を担うだろう。第一は、その運命を私がここで描いてきた社会運動として、後に続くレジームがジェンダー公正の約束をたしかに制度化するように追求するというレベルで。しかしまた第二に、第一の意味でのフェミニストがもはや所有も制御もしていない、漠然とした言説的構築物として——善の空の標示物として（おそらく「デモクラシー」のように）。これは、そのすべてがジェンダー公正を推進するとは限らない、様々なシナリオを正当化するために動員できるし、また、動員されるだろう。第一の、社会運動という意味でのフェミニズムの子どもとして、この第二の、言説的意味での「フェミニズム」は乱暴者である。言説が運動から独立するにつれて、運動は、それ自身の奇妙な影法師、薄気味悪い分身に対決させられ、これをたんに受け入れることも完全に無視す

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

(13)
 ることもできない。

この論考で、私は、国家組織型資本主義からネオリベラリズムへの移行の中で、この二つのフェミニズムの面食らうダンスを描いてきた。ここから何を結論づけるべきだろうか。もちろん、たんに第二波フェミニズムは失敗したということではなく、ネオリベラリズムの勝利に責任があるということでもない。もちろん、フェミニズムの理想が本来的に問題だということではなく、常に資本主義の目的に再意味化されよう予め運命づけられているということでもない。フェミニズムは何よりもジェンダー公正のための運動であるとする者は、薄気味悪い分身も生息している土壌で活動しているのであるから、歴史に対してもっと自覚的である必要があるということである。

その目的にむかって、問いに戻ろう。何が——もしそれがあるとして——フェミニズムとネオリベラリズムの「危険な結びつき」を説明するのか。私たちは不幸な偶然の犠牲者なのか、悪い場所・悪い時間にたまたまいて、誘惑者の内でも最も日和見主義——どんな展望、自分と本来異質な展望でも道具化してしまう資本主義——の餌食となったということなのか。それとも、先に提起したように、フェミニズムとネオリベラリズムの間には、なんらかの地下の親和性があるのか。もしそうした親和性が本当にあるとするならば、それは伝統的権威に対する批判⁽¹⁴⁾にある。こうした権威は、フェミニズムのアクティヴィズムの長い間の標的である。少なくともメアリ・ウォルストンクラフト以来、それは、男性への人的従属（父、兄、聖職者、年長者、夫）からの女性の解放をめざしたものだった。だが、伝統的権威が、資本の伸張への障害に見える時期もある。つまり、市場が歴史的に埋め込まれ、経済合理性を限定範囲内にとどめるのに役立った周辺の社会実体の一部分でもあった⁽¹⁵⁾。現時点では、伝統的権威へのこの二つの批判、すなわち、一つはフェミニストの、もう一つはネオリベラリズムのそれは、収斂するように見える。

対して、フェミニズムとネオリベリズムが分岐するのは、ジェンダー従属のポスト伝統的形態——個人的従属の形態ではなく、多くの人の行動が抽象的・非人格的に媒介される構造的体系的過程から生ずる、女性の人生への制約——においてである。そのパラダイムの例は、スーザン・オーキンが「結婚によって社会的に引き起こされる、決定的に非対称的な脆弱性のサイクル」と特徴づけたものである。すなわち、子育てという伝統的な責任が労働市場において女性を不利にし、経済市場における不平等な力となり、それがまた、家族内における不平等な力をさらに強化し、悪化させる⁽¹⁶⁾。このような、市場に媒介された従属の過程は、ネオリベラル資本主義の活力源そのものである。したがって、今日、ネオリベリズムとたもとを分かち、再意味化を避けようとするならば、これらは、フェミニストの批判の大きな焦点そのものになるべきである。もちろん、重要なことは、伝統的な男性的権威に対する闘いを止めることではない。それは、フェミニストの批判の不可欠の契機であり続ける。そうした批判からネオリベラル的分身への安易な移行を阻み——なかでも、人的従属に対する闘いを資本体制に対する批判と再び繋げるということである。その資本体制は、解放を約束しながら、実際には、一つの支配を他の支配に置き換えるのにすぎないのだから。

この課題を進めることを期待して、フェミニストの批判の4つの焦点を最後に再確認して締めくくりたい。

ポストネオリベラルの、経済主義批判

ネオリベリズムからの移行の可能性は、フェミニズムの解放の約束を再活性化させる機会の到来である。不公正の完全に三次元の解釈を採用して、前時代には分散していた再配分・承認・代表の三つの次元をよりバランスのとれた形で統合してはどうか。フェミニストの批判のこうした不可欠な局面を、力強く今日的な社会的全体性の感覚の中に位置づけて、フェミニストの批判を資本主義批判と再結合し——フェミニズムをきっぱりと左翼

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

に再度位置づけるべきである。

ポストネオリベラルの、男性中心主義批判

同様に、ポストネオリベラル社会への移行の可能性は、フェミニズムの「家族賃金」批判とフレキシブルな資本主義との偽の結合を絶つ機会の到来である。男性中心主義への批判を奪回して、フェミニズムは、賃金労働を相対化し、ケア労働をはじめとする商品化されていない活動の価格設定をするようなライフをめざして働きかけてはどうか。現在は女性によって大半が担われているが、こうした活動は、誰にとってもグッドライフの貴重な要素となるはずだ。

ポストネオリベラルの、国家管理主義批判

ネオリベラリズムの危機は、フェミニズムの国家管理主義批判と市場化との関連を絶つ機会の到来でもある。参加デモクラシーという大枠の奪回をめざして、フェミニストは今や、官僚的管理者主義を市民のエンパワーマントに従属させる、政治権力の新しい組織をめざして働きかけてはどうか。しかしながら、重要なことは、公権力を、消散ではなく、強化することである。したがって、今日めざしている参加デモクラシーは、市場を馴致し、社会を公正へ向けるために政治を使うものである。

ポストネオリベラルの、ウェストファリアリズム批判

最後に、ネオリベラリズムの危機は、ウェストファリア体制に対するフェミニストの長年の相反的対応を生産的に解決する機会の到来である。資本のトランスナショナルな伸張からすれば、今日必要とされる公的能力は、領土国家の中におさまるものではない。したがって、ここですべきことは、デモクラシーを専ら領土国家と同一視することからの離陸である。他の進歩的勢力と手を組んで、フェミニストは、新たな、ポストウェストファリアの政治秩序——いかなるレベルでも民主的な、多様なスケールをもつ秩

序をめざして働きかけてはどうか。補助を参加と結びつけた、民主的勢力の新たな布陣は、あらゆる次元、あらゆる軸、あらゆるスケールに照らした不正を正すことができるはずであり、これには、トランスボーダーの不正も含まれる。

つまり、フェミニストは大きく考えるべき時であると提起したい。ネオリベラルの猛攻が、私たちの最良の理想を道具化するのを目にした後、それを奪回する新たな始まりをむかえている。この機をつかんで、目前にある、現状変革の弧を公正の方向へ——ジェンダーに関してだけでなく——向けられるのではない⁽¹⁷⁾か。

- (1) 〔訳者注〕本稿は、Nancy Fraser, "Feminism, Capitalism and the Cunning of History," *New Left Review* 2: 56 (March/April 2009: 97-117) の訳である。ナンシー・フレーザー (1947-) は、アメリカ合衆国の代表的フェミニスト政治理論家である。
- (2) 本稿は、「ジェンダーとシティズンシップ：古くて新しいジレンマ、平等と差異の間」に関するコルトーナ・コロキウム (2008年11月) で発表した基調講演を元に行っている。有益なコメントをしてくれた、コルトーナの参加者、なかでも Bianca Baccalli, Jane Mansbridge, Ruth Milkman, Eli Zaretsky, また、政治道徳社会学グループの EHESS セミナーの参加者、なかでも Luc Boltanski, Estelle Ferrarese, Sandra Laugier, Patricia Paperman, Laurent Thévenot に感謝する。
- (3) この用語をめぐる議論については、Friedrich Pollock 「国家資本主義——その可能性と限界」を参照。Andrew Arato と Eike Gebhardt 編『フランクフルト学派基本読本』(ロンドン, 1982年), 71-94 頁。
- (4) さらに、共産圏の経済生活も悪名高いように国家組織型であり、今でもなおそれを国家組織型資本主義と呼びたがる人々もいる。その見解にも一理あるかもしれないが、より普通の見解をとって、私の物語の最初の部分からこの地域を除外しておく。その理由の一つは、この地域で第二波フェミニズムが政治勢力として誕生したのは1989年以降であり、その頃には元共産国になっていたからである。
- (5) 「ウェストファリア的な政治的思考法」については、フレーザー「グローバル化する世界の中で公正を再構想する」(『ニューレフト・レビュー』第36号, 2005年11-12月) を参照。
- (6) 「再意味化」という用語を Judith Butler 「偶然の土台」より借用する。Seyla Benhabib, Judith Butler, Drucilla Cornell, Nancy Fraser 『フェミニスト論争——哲学的交換』(ロンドン, 1994年)。
- (7) 政治主張の規則におけるこの変化について、フレーザー「再配分から承認へ?」(『ニューレ

フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ（関口）

フト・レビュー』I 第 212 号, 1995 年 7-8 月) を参照。

- (8) Hester Eisenstein 「危険な結びつき?—フェミニズムと企業グローバリゼーション」 (『科学と社会』第 69 巻第 3 号, 2005 年)。
- (9) Luc Boltanski と Ève Chiapello 『資本主義の新たな精神』(ロンドン, 2005 年 [パリ, 1999 年])。精神分析を「第二の産業革命」の精神と解釈し, フェミニズムを「第三」の精神とすることで結論とする点につき, Eli Zaretsky 「精神分析と資本主義の精神」 (『星座』第 15 巻第 3 号, 2008 年) を参照。
- (10) Sonia Alvarez 「フェミニズムを提唱する——ラテンアメリカのフェミニストの NGO 「ブーム」」 (『国際フェミニスト政治雑誌』) 第 1 巻第 2 号, 1999 年。Carol Barton, 「岐路に立つグローバルな女性運動」 (『社会主義と民主主義』第 18 巻第 1 号, 2004 年)。
- (11) Uma Narayan, 「インフォーマル・セクターの仕事, マイクロクレジットと第三世界女性の「エンパワメント」——批判的視角」 (法哲学社会哲学第 22 回世界大会 [2005 年 5 月, グラナダ] で提出された文書), Eisenstein 「危険な結びつき?」。
- (12) Margaret Keck と Kathryn Sikkink 『境界を越えるアクティヴィスト——国際政治における提唱ネットワーク』(イサカ, ニューヨーク, 1998 年)。
- (13) 「フェミニズムとその分身」というこの定式は, 2008 年のアメリカ合衆国大統領選挙に関してうまく説明できるだろう。そこには, ヒラリー・クリントンやサラ・ペーリンなどの薄気味悪い分身がいた。
- (14) この点を Eli Zaretsky に負っている (個人的通信)。Eisenstein 「危険な結びつき?」を参照。
- (15) ある期間にであり, 常にではない。多くの文脈において, 資本主義は伝統的権威に挑戦するよりも順応しがちである。市場の埋め込みについては, Karl Polanyi 『大転換』(第 2 版, ボストン, 2001 年) を参照。
- (16) Susan Okin 『公正・ジェンダー・家族』(ニューヨーク, 1989 年, 138 頁)。
- (17) [訳者補注] 本翻訳をするにいたった経緯は以下のとおりである。2010 年 12 月, ボストンで開催されたアメリカ哲学学会 (The American Philosophical Association) 東部分会で, 著者の講演を聴く機会があった。その場で本論考の翻訳を申し出, 著者から快諾を得た。